

人びとが創るもうひとつのアジア

ハリーナ

HALINA

no.43 2019年8月

【特集】

フィールドツアーで学ぶアジア



百姓 オブザワールド
SMALL FARMERS OF THE WORLD.

06

大豆の脱穀作業。右端がソ・ジョンフンさん。

インチョン カン フア ド
韓国・仁川市江華島

ソ・ジョンフンさん(54歳) Seo Jeong-hoon

ソさんが代表をつとめる共同体「コンセアル」は「三粒の豆」という意味です。先祖は豆を植える時に、一度に3粒ずつ——1粒は自分が収穫して食べるため、もう1粒は鳥や虫に食べさせるため、残りの1粒は近所の人と分け合うため——植えた、という話が由来となっていて、自然や隣人との共生をめざした先祖の知恵を実践しようという理念のもとに、2005年に共同体、そして2008年に事業会社が設立されました。

住居や子どもの教育まで生活のほとんどを分かちあう共同体メンバーは40家族、加えて事業会社の従業員として働く人たちが20人います。会社では、地域で栽培した大豆で豆腐や油揚げを製造したり、その他の有機農産物を栽培して加工食品を作ったりしています。江華島の特産品であるカブ、米などの農産物の直販もしています。自慢の豆腐は、機械を自分たちで再現して伝統的な方法で作っており、豆の香りと味わいが詰まっています。

事業の目的は利益を蓄積することではなく、共同体が持続できる程度の経済力を維持することだといいます。豆腐工場で働く従業員の60%以上は、一般的な企業への就職のハードルが高い長期失業者や低所得層の方たちです。また、障がい者と一緒に農業をし、回復と自活を助ける社会的農業を実践するモデル農場として農業省や地元の自治体に認定されました。

「村の中で共に働き、皆で子どもたちを見守り、お互いの世話をしながら老いていく。障がいを理由に差別されず、お互いに対等で親密な関係をつくっていく。そういう共同体になるのが夢です。物質や金銭が中心ではなく、相互に認め合う関係を大切にする暮らしの中で、共同体のメンバーがささやかな幸せを感じながら生きられることを願っています」とソさんは語ります。

〔インタビューまとめ〕

キム・ユキョン／Kim Yoo-kyung
ドゥレコープ教育活動センター



▲唐辛子の畑にて。

▶コンセアル自慢の豆腐や加工品。



最近、『商売』の本質について学んでいます。少し披露します。繁盛しているお店のキーワード、ご愛顧、愛着、愛用品……。では、この『愛』とはなんでしょう？（いきなりですが）『愛』とは、『受』の中に『心』と書くように、『愛』とは、すなわち『心から受け入れる』ことだと理解できます。実際、このシンプルな理解だけで、自分の周りの『愛』あるものを見渡すと、神やイエスキリスト、仏や菩薩、宇宙や地球、キング牧師やティックナットハン、ガンジーやヴァンダナ・シヴァ、洪沢栄一や松下幸之助、親や母なるもの、よく自分の話を聞いてくれる妻や友人など、

RELAY ESSAY ぽこぽこ poco-poco 43

愛ある商売、愛ある世界

ハッタケンタロー

環境エンタメ★プロデュース&デザイン



類、私たちの社会や人生を、喜ばせ、幸せにしてくれる。だとするならば、商売においても、お客様を喜ばせ、楽しませ、幸せにしたい！（&儲かりたい）なら、『愛』あるお店になること。『注文』とは、『主がそそぎ、文（＝願ひ）をさく』という意味として洞察できますが、つまり、「ウェイターが水を注ぎ、お客様の注文を聞く」という行為の意味は「巫女が、神酒を注ぎ、神がその人の願ひを聞く」のと同じ行為、アナロジー（共通する関係）であると読み解けますね。つまり『お客様から愛されるお店』になることは、『お客様』を『心より受け入れ』『その願ひを聞き入れる』ことであると。知っていましたか？『儲かる』

という漢字は『信者』と書きま。『儲かる』とは『愛』あるお店に集まる信者、すなわちリピーター、ファン、顧客がいるということ。信じる者によってお店が救われるのです。ひるがえって、多様性やマイノリティーの権利が求められる現代、愛ある国家、地域、組織、家庭をつくろうとするならば、ひとりひとりが心から、ひとつひとつのその弱い存在を受け入れ、その願ひを聞き入れることで、『愛ある世界』として繁栄する。まさに持続可能な発展、SDGsの理念「誰一人取り残さない」も、『商売』の本質と同じですね。■

Contents

02 【ぽこぽこ 43】
愛ある商売、愛ある世界◎ハッタケンタロー

03 【百姓 オブザワールド 06】
韓国・仁川市江華島
ソ・ジョンフンさん
〔インタビューまとめ〕キム・ユキョン

04 【特集】
フィールドツアーで学ぶアジア

他者と出会い、〈異和感〉を言葉にする
——ラオスの農村におけるフィールドツアーの試み
◎箕曲在弘

日本とインドネシアの農山漁村で学びあう
SUIJI-SLPの試み◎島上宗子

JCNCエクスポートツアーが
めざしたこと◎小林和夫

自分の「当たり前」を捨てた先にある気づき◎後藤 翠

09 【COLUMN】
〔百姓の100章 ②〕
国連・家族農業の10年スタート(2019～28年)
——地球と共にある持続可能な世界へ、一人ひとり誰もが
当事者「地球市民皆農」を
◎斎藤博嗣&裕子
〔続 Have you ever seen the cinema ②〕
『やさしくキスをして』◎重政栄一郎

10 【Topics】
01- スミフルブランドのバナナ梱包工場で
何が起きているのか
◎野川未央

12 【PtoP“最前線”】
産地の個性を感じられるコーヒーをめざして
◎棚オルター・トレード・ジャパン商品三課
スタッフ語る出張こぼれ話
フィリピーノ・ホスピタリティ・フォーエバー
◎小林和夫

14 【Voice from APLA partners】
From East Timor
土に還る？ 還らない？ 東ティモールでの学校菜園普及活動
From Negros, Philippines
畑での作業だけにとどまらない農業研修

15 事務局だより

16 【KITCHEN APLA】
レモンと塩味の貝◎按田優子

表紙のことば

数年前、フィリピン・ミンダナオ島最大のラナオ湖周辺を旅した。モスクが立ち並び、どこからともなくコーランの祈りが聞こえてくるまさにムスリム・カントリー。立ち寄った市場には溢れんばかりの商品を売る元気な女性たちがテントを連ねていた。マレーシア、インドネシア、遠くは南部タイのムスリムと繰り広げるバーター貿易品だ。セレベス海で採れる真珠、夥しい量の実版DVDやアクセサリー、そして色鮮やかな布……。『メイド・インどこ？』と聞いても「さあ」という答えしか返ってこない多国籍商売。

そこで見つけたのが通常の柄とは違ったこの一枚の布だった。「これはどこの海の色だろう？」と想像を逞くさせる青色が印象的だった。それから2年後、あの賑やかな町は政府軍の夥しい「反テロ」空爆で廃墟と化し、未だ島には戒厳令が布かれたままだ。あんなに陽気だった女性たちは今どうしているのだろうか？（大橋成子）

フィールド ツアーで 学ぶ アジア

今日、日本でも「外国人」を攻撃したり、排除したりするような言論や風潮が広がっています。私たちはすでに多様な出自の人びととともに暮らしているという現実があるにもかかわらず、です。そんな中、教育機関においてフィールドツアーが生まれ、人びとが外国に出て異文化を学ぶ体験をしています。またAPLAでも、前身の日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)の時代からアジアを訪問、交流し、アジアの人びとから学ぶツアーを重ねてきました。フィールドツアーは異文化を学ぶだけでなく、それを鏡に自分たちの社会を見つめ直す方法です。本特集では、アジアへのフィールドツアーで何を、どう学ぶのか、現場の試行錯誤をご紹介します、フィールドツアーの実践知について考えます。

文化人類学者からみる ボランティアツアー

一方で、文化人類学を専攻し、国際的な経済指標からすると「貧しい」と考えられ、国際協力の支援対象となる国で長年フィールドワークを行ってきた私は、このようなボランティアツアーの興隆に少しばかり妙な感覚を抱いている。

私は東南アジアの内陸国ラオス南部のコーヒー生産地域に約2年弱住み込み、調査を行うことで、彼らの生活を内側から理解することに努めてきた。この経験を経て、2013年に着任した東洋大学社会学部で、ラオス南部のコーヒー産地に学生を連れて訪問するスタディツアーを毎年実施するようになった。

このツアーの受入団体は、オルター・トレード・ジャパン(ATTJ)が2010年よりコーヒーを買い取っているジャイコーヒー農民協同組合(JCFC)である。当初はJCFCの組合員世帯を訪問し家計調査を実施して、民衆交易が農家の生活にどういう影響を及ぼしているのかを批判的に理解し、課題を解決していく思考力と行動力を身につけることを目的としていた。同時に小学校における教育支援プロジェクトも実施してきた。

この目的のもと数年間ツアーを主催して、参加者が渡航後に自分の経験を振り返った際に出てくる言葉が、実に型には

他者と出会い、〈異和感〉を言葉にする ——ラオスの農村におけるフィールドツアーの試み

箕曲在弘／みのお・ありひろ
東洋大学教員、APLA理事

オルタナティブ・ツーリズムの ひとつとしての地域貢献型ツーリズム

2000年代に入り、国際協力や海外ボランティアを目的とした旅が、一部の正義感の強い学生たちを魅了した。「南の貧しい国々」の人びとの生活に関する情報が入手しやすくなったことにより、自分たちも何か行動を起こしたいと考えた学生たちは、NGOが主宰するボラン

ティアツアーやスタディツアーに参加し、孤児院を訪問したり、現地の小学校建設の手助けをしたりするようになった。このようなツアーの対象となる地域は、東南アジアや南アジアの国々が多い。

こうしたツアーは、オルタナティブ・ツーリズム(以下AT)の一形態だと理解することができ。ATに決まった定義はないが、マスツーリズムへの批判から始まり、訪問先の日常生活を理解すると

まったものになっていることに気づいた。たとえば、「彼らの生活は物質的には貧しいけれど、精神的には豊かであった」とか、「困難な状況でも努力して生き抜こうとしている姿を見て、心を打たれた」といった発言を聞き、この学生たちはしっかりと現地の人びとの生活のあり方を理解できているのであろうかと疑問を感じることも少なくない。

ボランティアツアーやスタディツアーを経験した学生たちに学んだことを振り返ってもらくと、そこには自分が育んできた暗黙の前提を疑わずに、自身の価値

観を基準として、他者との違いに着目した語りが頻繁にみられるのである。「ラオスの人たちの生活はとてものんびりしていて、そこには私たちが失ってしまったものがある」といった類の発言も、自己との差異を強調した典型的な語りとして多く聞かれる。

このような語りの型にはまってしまいう原因は、他者と出会った際に受ける衝撃をしっかりと言語化できていないことに原因があるのではないか、そしてその衝撃を昇華して、自分自身の生き方を再考したり、自分の固定観念を相対化したりするといった自己省察ができていない点にあるのではないかと考えるようになった。

もちろん、短期間の滞在で滞在先の人びとの生活の奥深くまで入れるはずはない。しかし、自分たちとは異なる言葉を話し、異なる環境のなかで育った人たちを理解する「ものの見方」を習得していない場合、学生たちは自分の見たいものしか見ず、見たものを自分の理解可能な枠組みに落とし込んで解釈してしまう。こうした学生たちの発言には、彼らの価値観や固定観念を覆し、彼らの内面そのものが変容していく様子が見られない。これでは、何のため



毎年学生たちが企画を立てて初等教育の課題解決に取り組む。

に異質な他者と出会っているのかわからない。以下では、私の具体的な取り組みを説明しながら、フィールドから学ぶ方法を紹介したい。

〈異和感〉を起点とした自己省察

私がツアーを実施するうえで学生に求めているのは、〈異和感〉をきっかけとした自己省察である。それは、他者とかかわりながら、自己の暗黙の前提を覆す経験である。一例をあげてみよう。

ラオスには2回目の渡航となるOS(仮名)くんは、帰国後に記した報告書にこう書いている。毎年ツアー中に行っているアヒルの屠殺の経験やコーヒーの収穫から加工の過程について感じたことを書いたうえで、彼は「そういえば、日本では最後の結果が目前に現れることが多いな」と気付いたと、その時の心の動きを記している。「日本のスーパーに並ぶ、『牛肉の商品』という『結果』には、牛

が生まれてから育ち、殺され、加工されるまでの『過程』がある。しかし、私は日本で：『最後に出来上がるもの』だけに目がいつてしまう」。

彼はこの気づきをさらに敷衍させ、『結果を出すこと』と『正解を出すこと』が一緒のことという暗黙の前提が自分の中にあることに気付いた」と記す。そして、学生たちの渡航中のミッションである小学校の教育支援プロジェクトについて言及し、その結果だけをみて、良い・悪いと判断してよいのかと問う。そのうえで彼は「何かの事件や問題に対しても、その背景にある過程を無視して、非当事者間で薄っぺらい意見が飛び交っている」と言い、日本ではあたかも自分が裁判官であるかのように「人びとが良し悪しを言いすぎる」と指摘する。

こうした思考は、彼自身が感じた様々な〈異和感〉を結び付ける形で進んでいく。アヒルの屠殺やコーヒーの収穫という現地でしかできないような経験をともに、「物事の結果」しか見ていなかった自分の暗黙の前提に気付き、それだけがすべてではないという認識にたどり着く。そして、その改変された認識をもってして、帰国後の日本で感じた〈異和感〉と

〔注〕一般的には「違和感」と書くが、私はあえて「異」という概念を使っている。文化人類学者の山口昌男はかつてこの違いについて興味深いことを述べている。「違和」には同質なもの同士の微妙なちがいであり、「異」は「内」以外の間にあるような帰属のちがいである(『文化と同質性』)。私が考えるのも「異」のなかに含まれる質の異なる外部性である。自分たちの調和の揺るぎをかける他者と出会いが異和感を生む。

結びつける。つまり、「人びとが良し悪しを言いすぎる」という指摘は、渡航前には気付かなかった視点であり、渡航して現地の人の側に身を置くことで初めて見えてくるものなのである。

教員である私自身は学生たちに〈異和感〉をもって、なぜそう思ったのか自身の経験振り返り、言語化せよと伝えていく。ときには学生たちの個々の発言に対して、どうしてそう考えたのかと問いかけ、学生たち自身がまだ気づいていないモヤッとしたものについて言葉にせよと迫ることがある。こうしたやりとりをしていくうちに、学生たちのなかには、他者理解を通じた自己省察が可能になる場合がみられる。

もちろん、すべての渡航者がこのように考えられるわけではない。だが、少なくとも教員としては、彼ら・彼女らが表層的な他者理解や自己省察なしの他者理解に至らぬよう、小さな〈異和感〉を見逃さないように促し、「なぜそう考えたのか」と問いかける。

文化人類学の目的は単に他者の文化を記述することではなく、それを通して自分自身でさえそれまでは気付いていなかった暗黙の前提に気付き、世界の新たな見方を提示することにあると言われることがある。私のスタディツアーの試みはまだ発展途上ではあるが、このような自己省察のあり方を体得する場として発展させていきたいと考えている。

3割が翌年アドバンストに進んでいる。

日本とインドネシアを往還し、学びあう

人口約2億6千万、5%を超える経済成長率を維持する新興国インドネシアと、低成長率と人口減少に転じた先進国日本。SLPの最大の特徴は、この両国の学生が両国の農山漁村を往還しながら、学びあう点にある。

インドネシアの学生たちにとって、子どもをほとんど見かけず、空き家や廃校が目につく四国の農山漁村は「衝撃」である。なぜ、お年寄りが独りで暮らしているのか、資源を活用して観光開発できないのか。インドネシア学生の素朴な問いは、日本の学生たちにとって、日本社会を見つめ直し、よそ者としての自分の役割を改めて考える契機となる。

日本の学生たちは、インドネシアの村々で、海や道端にゴミが無造作に捨てられる光景に愕然とし、ゴミ問題解決は多くのサイトで活動目標の一つとなる。また、子どもに溢れ、近所同士が家族のようにつきあい、身近な自然を活かした暮らしぶりに、「地域が生きている」姿を実感する一方で、インドネシアでも若者の農業・漁業離れが進みつつあることに気づく。いつか日本のようになるのか。開発は何をもたらすのか。幸せとは何か。日・イの学生間でそんな議論が夜遅くまで続く。

「支援する者／される者」という関係を超えた学びへ

こうした試みは、「支援する者／される者」という認識枠組みを乗り越えようとする試みのひとつにすぎないが、今日、

日本とインドネシアの農山漁村で学びあうSUIJII―SLPの試み

島上宗子／しまがみ・もここ
愛媛大学教員

愛

媛大学では、香川大学、高知大学とインドネシアの3大学と連携し、2013年度からSUIJII―スライニング・プログラム(SUIJIIはSociety of University Initiative Japan Indonesiaの略。以下、SLP)を実施している。SLPは、日本とインドネシアの学生が、両国の農山漁村に共に滞在し、地域貢献を目指した活動を試みながら学ぶプログラムである。グローバルな視野とつながりを活かしながら、地域から持続可能な未来を創る次世代を育てることを目的としている。

私自身、1980年代後半、大学時代に参加したNGOによるスタディツアーが「アジア」に関わる第一歩となり、その後、アジアへのスタディツアーやフィールドワーク・プログラムなどに企画・実施側として関わってきた。SLPは、

互いに考えあう相手

たとえば、瀬戸内海の小さな島に生まれ育った学生Aさんは海外SLの報告書の中で、次のように自問する。「現在の日本は、より快適な生活を求めて発展し、便利なもので溢れている。そして、これらのものを手に入れるために、人びとは働き続ける。本当の幸せとはお金を稼いで、なんでも手に入るようになることなのか」と。さらに、それを、若者が出ていき「すっかり弱ってしまった」故郷の状況に重ね合わせ、インドネシアの村に観光開発がもたらすかもしれない正負の変化にも言及しながら、「幸せとお金のバランス」を保つことがインドネシアの村にも、私の地元の活性化にも重要なのではないかと気づいた、と記している。Aさんにとって、インドネシアは、単に、問題解決を支援すべき対象でも、日本が失いつつある価値を学ぶ場でもなく、未来に向けて共通の課題(幸せとお金のバランス)を互いに考えあう相手・パートナーとして意識されているようにみえる。SLPで大切にしたいのは、日本とインドネシアを往還する中で生まれる、こうした双方向の関係性である。

履修後のつながり

国内・海外SLで寝食を共にし、冗談を言いあい、議論し、活動した学生間の関係は急速に強まる。帰国後も多くの学

これと類似の問題意識を共有している様々な取り組みを目にするようになった。渡航先の学生と共同で現地の課題を発見していく試みや、日本とインドネシアの両国をお互いの学生が行き来して、お互いの地域の課題に取り組む試みなども、

そのなかでも、アジアとの双方向性を重視しており、アジアの今を感じさせるプログラムだ。その一端を紹介し、学生たちが「アジア」を学ぶ、「アジア」と学ぶ意味を考えてみたい。

SLPの枠組み

愛媛大学では、SLPはいくつかの科目から段階的に構成されている。柱となるのは、毎年8月に約20日間、四国で実施する「国内サービスラーニング(以下SL)」と2月に約20日間、インドネシアで実施する「海外SL」である。いずれにも、毎年、日・イ6大学から計100名ほどが参加し、実習サイト(1サイト15名程度に分かれて、活動する。国内と海外SLがあることから、海外に関心のある学生だけではなく、日本の地域活性

生がSNS等で日常的に連絡をとりあっている。また、履修をきっかけに、お世話になったサイトを自主的に訪問したり、インドネシア／日本を短期訪問したり、長期留学に踏み出す学生もいる。卒業後、国内の実習サイトへ移住した学生も出て

JCNCエクスポートジャーツアーがめざしたこと

小林和夫／こばやし・かずお
側オルター・トレード・ジャパン 広報課

日

本ではNGOが企画した活動現場などを訪ねるツアーは、通常スタディツアーと呼ばれている。一方、フイリピンではマルコス独裁政権時代より、多くの国内NGOがフイリピンの市民や大学生を対象にして社会問題の現場を訪ねるツアーを企画してきたが、そういつ



収穫作業を終えてサトウキビをがぶり(1999年撮影)

上述した固定的な構図を乗り越える可能性を孕んでいる。こうした試みを経験した学生たちは、将来、どのような世界観を形成し、いかに混沌とした現代を生き抜いていくのか。これからの楽しみである。■



日々の気づきを共有、議論する。

化に関心を持つ学生も集まってくる。

学生は、座学で視点・姿勢を学んだ後、国内SL、そして海外SLに臨む。ベシックとアドバンストのレベルがあり、ベシックを履修し、さらに学びを深めたい学生はアドバンストに進み、国内・海外SLでよりリーダーとしての役割を果たす。学部・学年を問わず、履修可能だが、1年次にベシックを履修する学生が9割以上を占める。例年、その約2

きた。こうした近況がSNS等で共有されることで、互いの刺激となり、関係を継続・発展させている。彼らにとっての「アジア」はより対等で、何かを共に創っていく感覚が強いように思えるし、それを期待したい。■

たツアーは「エクスポートジャー」と称されていた。エクスポート(expose)とは「さらけ出すこと、暴露」という意味である。マスメディアではなかなか取り上げられないような差別や抑圧、搾取や貧困の現場を訪れ、社会的弱者の「声なき声」に耳を傾け、問題の実態を広く社会に伝えることを意図したツアーである。

共感から問いかけ、行動へ

APLAの前身である日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)は、「エクスポートジャー」の考えに基づいて、現地の人びととの交流を大切にしたNGOであったと思う。設立当初から「現地へ行く、自分の眼で見る、地域で動く」を合言葉に、毎年複数のグループがネグロス

ひろつぐとゆうこの

百姓の100章

A Farmer have One Hundred Stories.



斎藤博嗣&裕子／さいとう・ひろつぐ&ゆうこ
—反百姓「じねん道」—

第12章 国連・家族農業の10年スタート(2019〜28年)

地球と共にある永續可能な世界へ二人ひとり誰もが当事者「地球市民皆農を

3月25〜29日、スペイン・バスク地方ビルバオ市で開催された第6回世界家族農業会議「家族農業の生活を改善するための10年」に参加してきました。5月19日スタートの国連「家族農業の10年」アジェンダに反映されるせつかくの機会なので、参加者全員が集まる本会議場で手を挙げて、次の内容を発言しました。

「世界的に見ても、農業は〈抱い手不足〉が共通の課題。農業を仕事とする人が増える具体的なプランを軸にアクションを展開すべきで、結果的に農民が増える政策が必要。農業の抱える課題を農民・農村の問題とせず、同じ時代、同じ地球上で生活する〈私たち皆〉の問題として考えること。食・健康・教育・水資源・生物多様性、異常気象、地球温暖化等、世界的課題の解決(SDGsの主



五大大陸に渡る会議の参加者に、タネを快く受け取って頂き、栽培や食べ方にとどまらず色々な会話が盛り上がりしました！(写真はWorld Rural Forumより)

私たちが実際にタネを蒔くことをすすめる意味は、世界中の皆が農村の現場で農民として暮らし働けば、農や地球環境に対し、自ら問題を感じ、自ずからその解決策を具体的に体得し、考え提言することができると思っています。結果としてSDGsの目標達成などたやすいのではないか。地球市民皆農「みんな一粒百姓にな〜れ！」一粒のタネ時きから「生きる自給率1年1人1%UP」の暮らしをはじめよう！地球と共にある永續可能な世界へ。

「百姓の100章」ハリナでの連載は今回まで。第13章以降は、またどこかの紙面で…。

※「反百姓「じねん道」の自家採種のタネを、<https://jinen-do.shopinfo.jp/>で購入できます。

続 Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? ——— 12

『やさしくキスをして』

【原題】Ae Fond Kiss
(2004年、イギリス)

【監督】ケン・ローチ

【出演】エヴァ・バーシッスル、アツタ・ヤクブ



『やさしくキスをして』
発売元：アミューズソフトエンタテインメント
価 格：中古品のみ販売

舞台はスコットランド、グラスゴー。主役はパキスタン系移民二世でクラブDJのカシムとアイルランド人で高校の音楽教師のロシーン。愛し合う二人は結婚を意識するが…。イスラムの教えとパキスタン人社会の習慣により、カシムの両親はこの交際を絶対に許さない。(父母は凄惨な過去を持つ移民というより難民で、家族を愛する当り前の善人である)ロシーンもまた教会でカソリックの神父に罵声を浴びせられ、異教徒との交際を非難される(明らかなバワハラだ)。

恋愛・婚姻の自由というグローバルスタンダード(以下GS)とそれを許さないローカル・ルール(以下LR)の衝突である。グローバル化が進むのに伴ない、こうした衝突は国や地域のみならず、職場、学校、家庭、男女間等あらゆる場で発生する。欧州で生まれ、主に米国で育ち、世界に広まったGSは、自由、平等、人権、反差別など人類普遍の価値のことである。一方、LRが言う「伝統」や「文化」の多くは既得権益の別名だ。それらは往々にして差別の上に成り立っている特に女性差別。長い時間を要し、幾多の確執・軋轢、時に惨事を巻き起こし、行きつ戻りつを繰り返したとしても、この衝突で最終的に勝利するのは必ずGSである。GSは、多分に「きれいごと」であるが、「きれいごと」だけに如何なる批判も寄せつけない。そして、この騒動の一つ一つがGSをさらに鍛え、より強力にしてゆく。グローバル化の進展と浸透は、不合理的な価値観と理不尽な慣習を砕き、マイノリティーに光を当て、弱者を救つ(例えば近年では同性婚やきこえる運動など)。宗教の持つ頑迷さや偏狭なナショナリズムに変化をもたすのも、GSしかない。

17年に同様のシチュエーションのコメディ映画が米国で作られる。こちらもうやはり終始すつたもんだの連続だが、まごつかなかく見事なハッピーエンド。しかも実話だ。

世界は常に、そして確実に変化し続けている。もちろん良い方向に！昨日よりも今日よりも、明日の方が必ず良い日になる。

※「反百姓「じねん道」の自家採種のタネを、<https://jinen-do.shopinfo.jp/>で購入できます。

自分の「当たり前」を捨てた先にある気づき

後藤 翠／ごとう・みどり

(株)オルター・トレード・ジャパン 商品四課

フェアトレードに興味があり、コーヒーホリックだった学生の私にとって、学生団体フェアトレード・ドリップバック・プロジェクト(通称ドリプロ)との出会いは大きな出来事でした。ドリプロはコーヒーの製品開発、産地訪問、販売などを通し、フェアトレードおよびラオスのコーヒーの認知を広めるというミッションを持った学生団体です。発起人の眞曲在弘さんが文化人類学者である影響で、ラオスのコーヒー生産者の暮らしをフェアトレードという切り口から考察していくなかで、文化人類学の視座も学ばせてもらいました。

大学では、開発経済学のゼミに所属し、「貧困」や「途上国」を定義し、なぜ人びとは貧困の民から抜け出せないのか、そのような地域や人びとがどのように経済発展していくのか、といった内容を研究する予定でした。しかしドリプロのスタディーツアーでラオスに赴いた後、文化人類学にも興味が湧き、他学部の人類学の先生にお願いをして、開発経済学と文化人類学、2つのゼミを掛け持ちさせてもらう事になりました。

文化人類学では人びとの行動や事象に基づき、その文化の中で発生している価値を自分の言葉で再構築していきます。何はともあれ、まずは事象そのものを否定したり、評価したりせずにニュートラルに考察する作業のなかで、「異文化」を感じる自分の価値観に気づかされる事も多々ありました。豆鉄砲を食らった鳩のように、驚きや気づきと対面する体験が大変印象的でした。

たとえば同じ言葉で会話しているつもりでも、我々の「フェア」とラオスの彼・彼女たちの「フェア」の意味が実は異なっており、その齟齬が掛け違ったまま、最後になって合意ができなかった事がありました。他にも「お金をたくさん稼げた方が良い」、「貯金をした方が良い」などといった自分の「当たり前」が、時に相手への理解を困難にさせることに気づきました。

こうした体験は研究としては興味深かったのですが、仕事を始めてからは板挟みになり苦むこともあります。それでもなお、大学時代に学んだ文化人類学の視点が、産地と一緒にあって「本当に必要なものは一体何か」を考えるための一つの土台をつくってくれと信じています。現在は、ATJでインドネシア・パプア州産の力カオを主に担当していますが、産地に行くとまた、豆鉄砲がたくさん飛んでくるのです。

J CNCの現地訪問ツアーでネグロス島を訪ねた人の正確な数字はわからないが、数百人単位であることは確実だ。その一人ひとりの心の中に何らかの種が蒔かれ、その芽が成長していることを願っている。

を訪問してきた。そこでは砂糖農園労働者の家に民泊し、彼らの生活を実際に体験するとともに、困難の中で懸命に生きようとする人びとと交流した。目にした現実を全国各地にできたネットワークで伝え、支援活動の輪が広がっていった。エクスポージャーの出発点は、現場に身を置き、差別や貧困をつぶさに見て、苦しむ人びとの痛みを肌で感じ、一人の人間として共感すること。現場は訪問者の日常の暮らしとはかけ離れた状況下にある。フィリピンのNGOスタッフは、現場に行くことを「飛び込む(dive)」と表現していた。共感や気持ちの問題にとどまらず、彼らのために何とかしたいと

いう分かち合いの行動につながるだろう。しかし、分かち合いや支援活動には対症療法的な効果はあるものの、限界もある。なぜ、ネグロスで飢餓が起きたのか、なぜ貧困が作りだされているのか。そこには、植民地時代の負の遺産とも言えるサトウキビの単一栽培に依存する経済、大土地所有制に象徴されるように一部の者が富を独占しているという構造的暴力の問題がある。社会構造を認識したり、ネグロスの貧困が自分たちの暮らしとどうつながっているのか、といった問いかけから次なる行動が生まれることを、エクスポージャーツアーはめざしていると言えよう。

「かわる、わかる、かわる」の循環

私自身も1995年にJ CNCで働き始めてから、ネットワークのメンバー、大学生や生協組合員のネグロス訪問ツアーに同行する機会が何度もあった。当時J CNCの代表を務めていた前島宗甫代表(現APLA名誉顧問)と彼の教え子である大学生と一緒にネグロスを訪ねたことが数回あるが、前島さんはボランティア活動の在り方を「かわる、わかる、かわる」という言葉で表していた。そして、現場を見ることがボランティア活動の根幹にあると。出会う、現実を知ることによって行動や生活に変化が起きる。この3つの

行動の輪が成長、拡大していく。J CNCはツアー体験を通して参加者の中にそうした循環運動が生まれることを期待していた。

また、前島さんは「お世話になって来い！」“Feel Filipino hospitality”、つまり「フィリピンの人たちの親切なもてなしの気持ちを味わって来い」と大学生をネグロス島に送り出していた。ネグロス訪問は日本人にとって異文化体験である。とくに地縁、血縁でつながるフィリピン社会は、人間関係も濃密だ。日本では絶滅危惧種になりかけているおせっかいおばさん、おじさんがたくさんいて、困っている人をほったらかしにはしない。人を受け入れる力量が大きい社会だ。空気を読むことが求められ、人に一定の距離を置いて干渉しない傾向が強い日本文化とは異なる。彼らは確かに様々な困難の中で生きる人たちが、ささやかな夢と希望を持ち、家族と日常生活を営んでいる。彼らと社会問題でつながるのではなく、人と人としてつながり友だちになること、そして、お互いに学び合うことが大事なんだという気持ちで込められているのだろう。

スミフルブランドのバナナ梱包工場では何が起こっているのか

野川未央／のがわ・みお
APLA事務局

フ イリピンのバナナプランテーションや周辺地域における農業被害の問題や生産者を苦しめる大企業との不平等な契約の問題については、これまで色々な形で報告してきましたが、残念ながら、バナナ産業における人権侵害の問題はいわゆる栽培の現場に限った問題ではありません。

2019年現在、日本のバナナの約30%のシェアを持つ「スミフル(旧・住商フルーツ)」がバナナの生産拠点にしている。ミランダナオ島のコンポステラ・バレー州では、約2200ヘクタールのバナナプランテーションが広がり、同地域には11つのパッキングプラント(梱包工場)が存在しています。プランテーションで収穫されたバナナの洗浄、カット、袋詰め、箱詰めを担っている工場です。

そうした梱包工場の労働者たちの大多数が低賃金・長時間労働に苦しんでいること、非正規雇用のため会社都合で容易に解雇されてしまうという問題については、2014年にオルター・トレード・ジャパン（ＡＴＪ）が実施したミシナオ

かかった約900人の労働者とその家族のことを考えると悠長なことを言っていない状況です。

若き組合代表の訴え

そこで6月半ば、労働組合NAMASU FA代表のポール・ジョン・ディゾンさん（以下PJさん）と同組合の幹部であるジャミラ・セノさんを日本に招聘し、外国特派員協会での記者会見や住友商事の株主総会に合わせたアクション、大学での講義や一般向けの公開報告会などに取り組みました。

来日した2人は、組合の代表として、そして一人の人間として、スミフルバナナ梱包工場での自分たちの窮状を訴え、日本のバナナ消費者に対して問題の解決のための支援を呼びかけました。ジャミラさんは7歳の息子を持つ20代のシンダ

労働者に対する暴力・脅迫事件

2018年 10月11日	フィリピン国軍・警察のスト鎮圧部隊が派遣され、ストライキ拠点を暴力的に破壊される。この鎮圧部隊の暴力行為によって17人以上の労働者らが負傷する。
10月31日	NAMASUFAの組合員で梱包工場340の労働者であったDanny Boy Bautista氏が所属不明の男2人に銃撃され死亡。
11月11日	NAMASUFAの組合員で梱包工場220の労働者であるJerry Alicante氏が、所属不明の男2人から銃弾2発を受けて負傷。
11月27日	スミフルフィリピン本社、フィリピン雇用労働省、ドゥテルテ大統領などに直訴するために労働者168名が首都マニラに上京し、座り込みを含む抗議行動を開始。
11月28日	さらに159名の労働者が大統領官邸前の抗議行動に合流し、計327名の労働者が以降マニラにて一連の抗議行動をつづける。
11月30日	未明にNAMASUFA代表Paul John Dizon氏宅兼NAMASUFA事務所、および隣接するNAMASUFA組合員宅などが放火され、部分焼。鎮火後、所属不明の男2名から銃弾6発が敷地内に発射される。
12月15日	未明にNAMASUFA代表Paul John Dizon氏宅兼NAMASUFA事務所、および隣接するNAMASUFA組合員宅などが再度放火され、全焼する。

エシカルバナナ・キャンペーンのウェブサイトより抜粋。

島のコタバト州の梱包工場労働者への取材でも明らかになっていました。

声をあげた労働者たちに対する
暴力事件、脅迫行為

話をコンポステラ・バレー州に戻すと、スミフルのバナナ梱包工場の労働者たちは、正規雇用化や労働条件の改善を勝ち取るために組合を組織し、10年以上にわたって声を上げつづけてきました。しかしながら、スミフル側は、労働者たちはいくまで請負事業者の社員であるとして組合との交渉には一切応じてきませんでした。事態が大きく動いたのが2017年のこと。3月には、フィリピンの労働雇用省による省令174号で「労働のみの請負」、すなわち日本で一般的に「偽装請負」と認知される雇用慣習が全面的に禁止されました。さらに6月7日にはフィリピンの最高裁判所によって、スミフルフィリピンと労働者らの間の直接雇用関係を認め、また労働組合NAMASUDUAを労働者の代表として認めるという判決が出たのです。ところが最高裁の判

ルマザです。何とか生活をするためにバナナの梱包工場で朝早くから夜中までの長時間労働を10年間続けてきた、非正規雇用のため有給はおろか、産休、病気休暇、忌引き休暇などは一切なく、大切な子どもと過ごす時間も限られている、などと涙ながらに訴えていました。昨年11月にマニラでの座り込みを開始して以降、ミンダナオの自分の母親の元に預けてきた最愛の息子とはずっと離れ離れのシヤミラさん。けれども組合の仲間たちは皆がそれぞれの困難、苦しみを抱えながら闘っているの、自分だけが弱音を吐くわけにはいけない、と言います。

そして25歳という若さで組合の代表を務めているPJさんは、ドウテルテ政権下のフィリピン、特に戒厳令下のミンダナオでは、組合活動することはテロリストというレッテルを貼られることに直

三人二言、經過二人、台動者之

ちが求めるスミフルでの正規雇用は実現せず、団体交渉も拒否されつづけたため組合はストライキに踏み切ることを決定します。正式な手続きを経て、2018年10月1日、コンポステラ・バレー州の7つの梱包工場の労働者約900人が一斉にストライキを決行します。労働者たちは梱包工場の前で平和的な座り込みをおこない、スミフル側が交渉に応じるまで何日でも抵抗する意思を示していました。それに対して、10日後の11日、フィリピンの国軍と警察、そして所属も正体も不明の男性たちによって座り込みの現場が襲撃されたのです。

さらにその後、次頁の表にまとめた通りの暴力事件、放火事件、そして組合員やその家族に対する絶え間ない脅迫行為が現在まで続いています。

フリーピンのウェブメディアによる報道で銃撃事件を知った私たちは、2018年夏に立ち上げたエシカルバナナ・キヤンペーンとして、日本のバナナのシェアNo.1を謳っている会社の生産地で起こった一連の事件を許すことはできないと、行動を起こします。まずは当事者である株式会社スミフルジャパン、そしてその大口株主である住友商事株式会社に対して真相究明と再発防止を求める要請文を市民団体や有識者の連名で送付しました。



住友商事の株主総会に合わせてのアクション。中央で声を上げているのがポール・ジョン・ディゾンさん。(2019年6月21日)

結する。しかしながら自分たちは労働者としての当然の権利を求めて闘い続けると母語ではない英語で堂々と訴えました彼の自宅は放火により全焼してしまったので、現在ミンダナオに残っている彼の家族は親戚などを頼ってバラバラに暮らしているそうです。けれども、まずは全員の権利（＝懲戒解雇の取り消しと正規雇用）を勝ち取ることが第一、と自分の家のことは脇に置いて組合の闘いを率いていきます。

住友商事の社会的責任を問う

驚くべきことに2人が記者会見を実施した同日（6月18日）のほぼ同時刻、スミフルグループの親会社であるスミフルシナガポール社の株式の全持分49%を2019年度上半期中に売却することを住友

遅々として進まない交渉

2018年末、フィリピン雇用労働省の仲裁の元で組合とスミフルフィリピンの間での交渉が設定されましたが、スミフル側から経営判断のできる役員が出席しなかったため年明けに延期になります（年明けの交渉にも役員は出席せず）。そのため、労働者たちはミンダナオに残してきた家族と離れ離れのまま、首都マニラの座り込みキャンプでクリスマスも新年も過ごすことを余儀なくされました。それどころか、その後も交渉は遅々として進まないため、マニラへの上京から半年以上が経過した6月半ば現在も約50人の労働者が座り込みを継続しています。

一刻も早くこうした状況の改善がはかれるように、日本側でも住友商事およびスミフルジャパンへの働きかけを続けてきていますが、この間スミフルジャパンからは一切の返答がありません。また対話の機会を二度ほど設定した住友商事に關しても、当初はスミフルグループのマイノリティ株主^{（注）}に過ぎないとして直接の責任を一切否定、その後もストライキを理由に不当解雇された労働者らに対しては再雇用プロセスが進行中であると説明し、問題が収束しつつあるという立場を表明しています。これについては、現地の労働組合側からの情報と異なるため証拠に基づいた事実の確認を求め、今後も対話を求めていく予定ですが、生活が

商事が発表しました。住友商事は、あくまで「スミフルの成長戦略」のためと説明していますが、自社の株主総会の3日前、そして労働争議中の労働者たちが来日している最中の発表というタイミングを考えると、この間の私たちの活動が住友商事に対してそれなりのインパクトを与えたと言えるのかもしれない。

なお、株式売却を報じた日経新聞の記事によれば、住友商事は「19年3月期には純利益ベースで15億円の取り込み益をスミフル社から得ていた」そうです。15億円という莫大な利益は、PJさんやジャミラさんのような梱包工場の労働者、さらには農園でバナナを栽培し収穫する生産者が流し続けることを強いられている「血と汗と涙」の塊です。私たちは、住友商事がその株主としての権利と責任を有する間、つまり株式の売却完了前にかかるべき対応の下に自社のグループ企業が、フィリピンで行ってきた人権侵害による被害を清算し、問題解決を図った上で完全撤退することを強く求めています。

〔注1〕一例として、ハリリーナヨの特集記事「甘いバナナの苦い現実」を参照。

《注2》ハリーナ2025の特集記事「現地報告・ミンダナオ島
リピンバナナの現実」を参照。

《注③》APLA・ATJ・PAPC（アジア太平洋資料センター）が呼びかけ
2018年夏に立ち上げたキャンペーン。詳細はウェブサイト
→ <https://www.e-banana.info/>

※4 環境部G.O.D.L. → http://www.parc-jp.org/kenkyuu/sumifru/sumifru_petition1142018.pdf

(注5) 2019年6月現在、住友商事はスミルグループの親会社であるSumitro Singapore社の株式の49%を保有している。残り51%の株式はモーリシャス籍のThornton Venture Limited社が保有。

現

代社会において最も身近な嗜好飲料の一つとなったコーヒーは、元来、アフリカのエチオピアあたりに自生していたと言われています。現在、コーヒーノキはおよそ70カ国で栽培されており、そのほとんどは、赤道から南北25度以内の「コーヒーベルト」と呼ばれる範囲の中に収まります。日本では、ブラジル、コロンビアをはじめとした中南米の産地の他、キリマンジャロを擁するアフリカなど、主要25カ国程から輸入されています。同じ品種でも、産地によって味が異なるところが奥深く、コーヒーは農産物なのだなあ、と強く思わせられるものです。

国際相場に振り回される生産者

さて、コーヒーの価格はピンキリです。100gで2000円もする焙煎豆もあれば、1杯100円で飲めるコンビニコーヒーもあるわけで、そこには当然、市場の原理が働いています。価格と品質と需給バランスの間でシビアな駆け引きがなされる投機商材の側面もあります。その中で蔑ろにされがちなのは、最も川上にいる生産者たち。2011年には1kgあたり6米ドル近かった価格が、2018年には約半分の3米ドル以下まで下落するなど、どんなに良いコーヒーを作っても国際相場に振り回され、利益が満足に得られ

産地の個性を感じられる
コーヒーをめざして

(株)オルター・トレード・ジャパン 商品三課



新しいコーヒーを植えた畑にて。(ラオス)

ない生産者も少なくありません。

そこでオルター・トレード・ジャパン(ＡＴＪ)は、高品質なコーヒー豆を安定的に輸入・販売することで生産者の暮らしを支える一助となるべく、1994年よりコーヒー事業を開始しました。今では8カ国からコーヒー豆を輸入していますが、なかでもアジア産のコーヒーとして、東ティモールとラオスでの取組みを重点的に進めてきま

した。

野性的な風味
——東ティモールコーヒー——

21世紀最初の独立国、東ティモールでの事業が始まったのは、独立直後の2002年。今なお4人に1人がコーヒー産業に関わっていると言われる東ティモールですが、当時の生産者は、摘んだコーヒーの果実をバイヤーの言

土地で育った個性を感じるコーヒーになります。ちなみに東ティモールのコーヒーは、やっぱりどこか野性的な風味。その魅力を引き出すべく、挑戦が続いています。

優しい味わい
——ラオスコーヒー——

一方ラオスは、実は日本の輸入量10位以内に入る大規模な生産国。しかし、日ごろその名を目にする機会は、それほど多くはありません。恐らく、輸入された生豆のほとんどは缶コーヒーやインスタントコーヒーといった加工用原料になるため、「生豆原産国：ブラジル、コロンビア、その他」の《その他》に括られるからではないかと思われる。役者で言えばその他大勢のエキストラ扱いですが、今有名な俳優さんでも、昔はそうなるところからキャリアをスタートさせた人は、たくさんいるはず。

そんなラオスコーヒーの実力を世に問うべく、2005年、アジアのコーヒー豆の中では希少なアラビカ種ティピカを中心にラオスコーヒーの輸入を開始し、2009年からは現在のパートナーであるジャイ・コーヒー生産者協同組合(JCFC)のコーヒー豆を取り扱うようになりました。すでにある程度の経験と技術を持っていた彼らの作るコーヒー豆は、その人柄のように、

こんなことが
あったんです！
スタッフが語る出張こぼれ話

フィリピーノ・ホスピタリティ・
フォーエバー

小林和夫／こばやし・かずお
(株)オルター・トレード・ジャパン 広報課

1990年代まで「アジアの病人」と言われるほど経済が落ち込んでいたフィリピンですが、2010年代に入って目覚ましい経済成長を遂げています。初めてフィリピンを訪問してから30余年、近年の街の変化には驚くことばかりです。



バコロド市郊外で進む宅地開発(機上から)

西ネグロス州の州都、バコロド市。以前は一面のサトウキビ畑だった郊外の農地がどんどん宅地に転換され、30坪程度の敷地に瀟洒な一戸建てが立ち並んでいます。そこに住むのは、かつての地縁・血縁の拡大家族ではなく、日本の都市郊外と同じ中流層の核家族でしょう。そういえば市内のあちこちで日本と似たような風景、ライフスタイルを見かけます。家族経営のサリサリストア(雑貨店)に代わって、すごい勢いで増えているのは24時間営業のコンビニです。かつては「フィリピンタイム」と揶揄されるくらいゆっくりした時間が流れていましたが、市内はいつも車で渋滞、歩行者用信号には「あと〇〇秒」の表示が付きました。短い距離でも歩かずトライシクル(乗り合いバイク)に乗っていたのに、夕暮れともなるとジョギングしている男性、女性が目立つようになりました。健康に敏感になっているのでしょうか。そういえば、煙草を吸う人の数もめっきり減りました。

フィリピンで経済が活性化することは喜ばしいことですが、こうした生活空間で育つ子どもはだんだん個人主義になってしまわないだろうか、何か街も薄っぺらになったな、と少々寂しい気持ちで庶民の乗り合いバス、ジブニーに乗ったら、そこは昔と変わらぬ空間。混んでいても席を詰めて座らせてくれたり、立っているよその子どもを自分の膝に座らせてあげたりするなど、おせっかいでホスピタリティ溢れるフィリピン人が健在でした！



チェリーを洗浄する生産者。(東ティモール)

肉付きのまま乾燥させることでより味の特徴が出る非水洗式に挑戦したり、ティピカ以外の品種も選別して収穫したりと、コーヒーの多角化を進めています。

を提供しています。そんな産地、他にあまりないのではないのでしょうか。決して経済的に豊かとは言えないものの、コーヒーが生活の軸となりきちんと回転する、充実した暮らしが営まれている事例と言えます。

コーヒーは消費者にとっては嗜好品であっても、生産者にとっては生活の糧です。至福の一杯の裏には一人の生産者の生活あり。「ああこういう人たちが作っているんだなあ」と感じられるようなコーヒーを生産者と一緒に作っていきたいと思います。■

い値で売るだけといった状況。品質もなにもないようなところからのスタートでした。

そのため、立ち上げ当初から一貫して目指してきた事業の目標の一つが、少しでも彼らの作るコーヒーの価値を高め、より良い収入につながる安定的な仕組みを構築することです。価格の合意形成をしたうえで生産者から直接買入れる。かといって、品質が良くなければ販売できずに事業が成り立たないため、他の産地とも競合できるような品質改善に向けて取り組む。これを、年に1回の収穫の度に繰り返してきたわけです。

継続は力なり。今、東ティモールの産地では、20グループ、約380人の生産者が熟した果実だけを収穫して選別し、その果肉を除去して水洗し、中のパーチメントをきれいな水の中で発酵させることで表面のぬめりを取り、それを天日で乾燥する、というすべての手順を自分たちで行っています。この工程は、他の主要産地における小規模生産者が行っていることと全く同じ。ゼロからスタートした彼らは、わずか20年足らずの間で世界の水準に追い付きつつあります。目下、それらの工程を極めるべく、現地法人オルター・トレード・ティモール社(ＡＴＴ)と協力し、叱咤激励の日々。きちんとした手順で仕上がった水洗式の生豆は、その

これまで季刊で発行してきた『ハリーナ』ですが、今年度は事務局長が5月から産休に入っていることもあり、事務局体制の都合により、今号および2020年2月の2回のみの発行とさせていただきます。会員の皆さまにお届けする紙媒体での情報が大幅に減ってしまうこととなりますが、何卒ご了承ください。

なお今号は、APLA評議員の安藤丈将さんが編集チームに加わってくださいました。これまでも特集の座談会に登場してくださったり、百姓オブザワールドで香港の農民の方を紹介してくださったり、『ハリーナ』読者の皆さんにはお馴染みのお名前かと思います。

その安藤さんが今年4月に上梓された『脱原発の運動史：チェルノブイリ、福島、そしてこれから』を読み進めているところです。チェルノブイリ原発事故の発生後、原発のない社会を求めて脱原発運動に関わり、民主主義を求めて立ち上がり、試行錯誤を重ねながら実践を積み重ねてきた草の根のアクティヴィストの皆さんが数多く登場します。折しもこの編集後記を書いている7月半ばは参議院選挙真っただ中（そして、皆さんのお手元に届いている頃にはその結果が明らかになっていますね）。どんな結果であろうとも、選挙で終わり、ではなくて、そこからスタート。過去から学び、現在そして未来のために行動を続けていきたいと思います。（野川）

ハリーナ

HALINA

2019年8月号 vol.02-no.43
2019年8月1日発行

【編集者】
安藤丈将
野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
(tel.) 03-5273-8160
(fax.) 03-5273-8667
(e-mail) info@apla.jp
(URL) https://www.apla.jp

【印刷】
有限会社だいもん印刷

事務局だより

事務局の動き（2019年3月～2019年6月）

2月 27日～ 3月 23日	フィリピンへ寺田が出張しました。
3月 2日	パルシステム東京主催「東日本大震災から8年、みんなで応援！復興トーク&カフェ～「3.11を忘れない」～」に参加しました。
3月 2日	震災から8年ー福島から考える今とこれからー①「東京×福島 自然エネルギーにかける想い」をアークス仏教国際協力ネットワークとJIM-NETと共催しました。
3月 3日	開発教育協議会からの依頼で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」をフリースペースえん@神奈川県川崎市で開催しました。
3月 9日	震災から8年ー福島から考える今とこれからー②「福島で生活する子どもたちのこれまでとこれから」をアークス仏教国際協力ネットワークとJIM-NETと共催しました。
3月 13日～ 19日	フィリピン・ネグロスへ秋山が出張しました。
3月 16日～ 24日	東ティモールに野川が出張しました。
3月 19日	パルシステム埼玉平和募金贈呈式に参加しました。
3月 30日	震災から8年ー福島から考える今とこれからー③「311の学びから原子力災害に備えよう！」をアークス仏教国際協力ネットワークとJIM-NETと共催しました。
4月 6日	理事会・評議員会を開催しました。
4月 13日	フレンドリークラブ（神奈川県）で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。
4月 15日、 16日	「2019年度アークス春合宿 in 京都」に寺田が参加しました。
4月 19日	パルシステム埼玉（知ろう！エシカル・テーマグループ）でコーヒーワークショップを開催しました。
4月 20日、 21日	アーステイ東京2019にATJと共同で出店しました。
4月 24日	東洋大学で野川がバナナについての講義をしました。
5月 11日	アークス仏教国際協力ネットワーク主催の「東日本大震災チャリティバザー」にPtoP Caféで出店しました。
5月 18日	東ティモールフェスタ2019に実行委員団体として参加しました。
5月 25日	フェアトレードマルシェむさしのに出店しました。
6月 6日	パルシステム埼玉（狭山）で「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。
6月 8日、 9日	第4回食育マルシェ&食育映画祭に出店し、エシカルチョコバナナワークショップを寺田が担当しました。
6月 9日	第8回ブルーデイズで野川がバナナについての講演をしました。
6月 18日	横浜市立瀬谷第二小学校の6年生のクラスで寺田がバナナについての授業をしました。
6月 19日	大東文化大学で野川がバナナについての講義をしました。
6月 20日	農業経営大学校で野川が講義をしました。
6月 21日	フレンドリークラブ（神奈川県）でコーヒーワークショップを開催しました。
6月 23日	エシカルバナナ・キャンペーン実行委員会として「報告会：あなたのバナナはいいバナナ？」を開催しました。
6月 26日	千葉商科大学「ソーシャル」の取材を受けました。
6月 26日	日本大学・富岡ゼミで寺田がネグロスについての講義をしました。
6月 28日	JCNC北海道の例会に参加しました。
6月 29日	「フェアトレードフェスタinさっぽろ2019」で野川がバナナについてのトークをしました。
6月 29日～ 7月 17日	フィリピン・ネグロスへ寺田が出張しました。

事務局からお知らせ

エシカルバナナ・キャンペーンでは、個人賛同および団体賛同を募っています。
個人の方はウェブサイト (<https://www.e-banana.info/>) から情報の入力を、団体賛同についてはAPLA事務局までご連絡ください。

SNSのフォロー、情報拡散もどうぞよろしくお願いいたします。

Facebook: <https://www.facebook.com/ethicalbanana/>

Twitter: <https://twitter.com/ebanana16>

『ハリーナ』のバックナンバーがウェブサイトでもご覧いただけます。

最新号発行に合わせて前号を掲載しています。「ハリーナ」を紹介くださる時などにご活用ください。
<http://www.apla.jp/archives/publications>

Voice
from
APLA
partners

ただモノを配布するだけではなく、子どもたちに教材をつかった遊び方を教えたり、先生たちにフリップチャートの内容を、レクチャーしたりする役目を、循環型農業について実践を通じ

た。またモノを配布するだけではなく、子どもたちに教材をつかった遊び方を教えたり、先生たちにフリップチャートの内容を、レクチャーしたりする役目を、循環型農業について実践を通じ

From Timor Leste
東ティモール
土に還る？ 還らない？
東ティモールでの学校菜園普及活動

コーヒー産地・エルメラ県での作物の多様化や環境保全活動から発展し、2016年からは県内の公立小中学校における学校菜園の活動をサポートしています。2018年度は、子どもたちがゴミの分別について遊びながら考えられるゲーム教材、学校菜園の基本的なポイントをもとめたフリップチャートを作成し、県内3郡の中央校・分校合わせて26校に配布しました。

From Negros, Philippines
ネグロス
畑での作業だけに
とどまらない農業研修

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KFR）で研修生



2015年のクラウドファンディングで購入した軽トラックが活躍しています。



第8期生のドロイくんはサトウキビ農園の労働者だった。

とスタッフが生産したものは、大切な収入源。「今は何の野菜がある？」と、直接農場にやってきたお客さんに対して、その場で野菜を収穫して販売するか、KFRがあるハギミット村

やラカルロータ町内を引き売りし、小さな商店や歩いている人びとに声をかけて販売しています。最近では月・水・金曜日が収穫日となっていて、注文があれば

ばその量をパッキングし、軽トラックにめいっぱい積み込み出發します。引き売りには研修生も同行し、販売や値段交渉を実際に体験することでマーケティングも学んでいきます。

この日の担当研修生はドロイくん。ノートに野菜別の販売量と販売額を記入していきます。初めはおとなしかった研修生たちも段々と「おばちゃん、他の種類の野菜もあるよ」「ココナツをまとめて買ってくれたら安くするよ」としつかりセールストークをするようになり、販売に慣れてきた様子でした。最後にノートの数字とお金が一致し、一安心なドロイくんなのでした。

（寺田俊／APLA事務局）



ゴミの分別について説明するマルクスさん。



野菜くずは有機ゴミ？ それとも燃えないゴミ？



自然にあるものを活用して虫を防ぐには？

KITCHEN APLA

キッチンあぷら

Featuring **ゲランドの塩**

レシピ提供・料理

按田優子／あんだ・ゆうこ
東京くらげ(※)



レモンと塩味の貝

コツは、塩とレモン果汁を思い切り入れて、ものすごくしょっぱくて酸っぱい汁にすること。
冷めても熱くてもどちらでも美味しい一品。

材料 (4人分)

好みの貝類… 約500g
ゲランドの塩(粗塩) … 大さじ1
水… 約500cc
レモン果汁… 1個分
バター… 大さじ3
水溶き片栗粉… 適量
パセリ… 3枝

作り方

- [1] 大き目の鍋に水を1cmくらい入れ、好みの貝を入れて蓋をして弱火で煮す。
- [2] 貝が開いたら一旦取り出し、レモン果汁とゲランドの塩(粗粒)とバターを入れる。
- [3] 仕上げに水溶き片栗粉で少しとろみをつけて貝を戻し、刻んでおいたパセリを散らす。



写真は、「ゲランドの塩 粗塩 1kg」

ゲランドの塩はオンラインショップ APLA SHOPにてご購入いただけます(ケース単位のみ)。
<http://www.aplashop.jp/>



(※)東京くらげとは… 日本と世界の保存食、加工食が面白くて仕方ない料理人・按田優子と、そんな按田優子が面白くて仕方ない流しのエディター・しまぎさみさこによる、骨なし無色透明な料理ユニット。

ハリーナ HALINA

2019年8月号 vol.02-no.43 2019年8月1日発行 頒価 300円(税込)

【編集・発行】

特定非営利活動法人 APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F
(tel.) 03-5273-8160 (fax.) 03-5273-8667 (e-mail) info@apla.jp

〈URL〉 <https://www.apla.jp>

APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって
APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、新たにサポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

問い合わせ・申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。
QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

